

# 伊豆新島木村方言のアクセント

## —音環境とアクセントとの関係を中心に—

出 野 憲 司

### 0. はじめに

伊豆新島方言のアクセントについては、平山（1965）（注1）を始め、木野田（1974）（注2）、辰浜（1975）（注3）、大島（1993）（注4）において詳細な研究がなされている。本稿は、昭和63年9月に大島一郎先生の指導のもと、東京都立大学国語学研究室で行った新島方言の記述的研究に参加して得た資料の一部に、その後数回個人的に行った調査に基づく資料を加え、まとめたものである。本稿では、新島本村方言のアクセント体系及び音環境とアクセント（注5）の関係を中心に、先行研究を参考にしながら記述する。

本稿をなすにあたっての資料収集には、主に次の方々のご協力を得た。

菊地忠二郎氏（大正2年生まれ）

宮川 福 氏（大正5年生まれ）

宮川 朋子氏（昭和51年生まれ）

### 1. 新島本村方言のアクセント体系

新島本村方言高年層のアクセント体系を示すと表1（1～3）の通りである。

表中で、音声的相としたものは、観察された音調のタイプを示したものであり、いわゆる反省的型とは異なる。また、本稿では、方言形の表記にあたっては、音声記号ではなく音韻記号を用い、高い拍を示すときには、その拍を「 $\uparrow$ 」で囲んで示した。具体的音声については、大島（1993）第1章音韻を参照していただきたい。

表1（1）

拍数	音韻論的解釈	音 声 的 相	ア ク セ ン ト 節 例
1	○	○, ○▶	蚊, 子, 血, 戸, 帆, 実, 日, 藻 ……
	○ $\uparrow$	○, ●▶	'i (絵), 木, ti (手), mi (目) ……

表1 (2)

2	○○	<p>●●, ○●▶                      ~○●, ○●▶</p> <hr/> <p>●●, ●●▶                      ~●●, ○●▶</p>	<p>柿, 傷, 腰, saki (酒), taki (竹)                      烏賊, 箱, 鼻, hida (膝), 布 ……                      行く, 売る, 聞く, 飛ぶ ……</p> <hr/> <p>njaE (庭), heE (灰), to'i (鳥)                      sue (吸う), cue (釣る) ……</p>
	○○ <sup>1</sup>	<p>○●, ○●▶</p> <hr/> <p>●●, ●●▶</p>	<p>石, 歌, 音, 川, 橋, 足, ino (犬)                      坂, 炭, 波, 花, honi (骨), 山 ……</p> <hr/> <p>keE (貝), soE (竿), ko'e (声) ……</p>
	○ <sup>1</sup> ○	<p>●○, ●○▶</p>	<p>雲, 跡, 糸, 海, 奥, 帯, 肩, 鎌 ……                      書く, 読む, diru-djuE (出る) ……                      neE (無い), 'ie (良い) ……</p>
3	○○○	<p>○○●, ○○●▶</p> <hr/> <p>○●●, ○●●▶</p>	<p>suzumi (雀), ni9oto (寝言), 氷,                      切手, kiEto (糸), ko'ibi (今夜)                      秋刀魚, 醤油, diN'wa (電話) ……                      'asubu (遊ぶ), 進む, 運ぶ ……</p> <hr/> <p>うどん, momiN (木綿), 'okeE (お粥)                      hiteE (額), kaza'i (飾り) ……                      'uta'u (歌う), kiraE (嫌う) ……                      'akeE (赤い), kureE (暗い) ……</p>
	○○○ <sup>1</sup>	<p>○○●, ○○●▶</p> <hr/> <p>○●●, ○●●▶</p>	<p>小豆, kakusi (ポケット), 男, 鏡,                      'eEti (相手), keEri (帰り), 番茶,                      女, あっち, 'jo'aki (夜明け) ……                      sakeE (境), 布巾, 'odiN (おでん) ……</p>
	○○ <sup>1</sup> ○	<p>○●○, ○●○▶</p>	<p>kokira (鱗), 火鉢, 'wakami (若布)                      朝日, 油, 命, 涙, 枕, 心, 柱 ……                      'i9oku (動く), 起こす, 頼む ……                      kuriE (黒い), takeE (高い) ……</p>

表1 (3)

3		●●○, ●●○	金魚, 胡瓜, 'aEbi (鮑) …… keE'u (帰る), heE'u (入る) ……
	○ <sup>1</sup> ○○	●○○, ●○○▷	欠伸, 烏, 便り, 二十歳, 柘榴, 牡丹, なっぱ, マッチ, daQko (雑魚) ……
4	○○○○	○○○●, ○○○●▶ ~○○●●●, ○●●●▶	自転車, 自動車, 'akanGo (乳児), su'iqko (未っ子) …… 'ateE'u (与える) …
		○○●●, ○○●●▶	おしろい, mociGomi (餅米), 唇, cukimUN (漬け物), mimizjoE (蚯蚓) 新聞, 鉄砲, 牛乳, ni'wato'i (鶏) … sitaGaE (従う), hazimjuE (始める) … 悲しい, 涼しい, 正しい ……
	○○○○ <sup>1</sup>	○○●●, ○○●●▷	'a'jato'i (綾取り), 'inGaE (縁側) 'eEmuN (和え物) ……
		○○○●, ○○○●▷	妹 ……
	○○○ <sup>1</sup> ○	○●●○, ○●●○▷	普段着, 飛行機 …… naGa'iru (流れる), hana'iru (離れる) ……
○○●○, ○○●○▷		sinseE (先生), 真っ黒, 本箱, 一回 kanGeE (考え) …… sirabiru (調べる), tasukiru (助ける) ……	
○○ <sup>1</sup> ○○	●●○○, ●●○○▷	sjoEbeE (商売), 'onbaE (おば), 貧乏, きんぴら, 狼 ……	
	○●○○, ○●○○▷	朝顔, 明後日, 一昨年, トラック, 白菜 'oGo'josu (鶯), hana'jomi (花嫁) …	
○ <sup>1</sup> ○○○	●○○○, ●○○○▷	'jaQkeE (厄介), 郭公, 蜜蜂 ……	

## 2. 新島本村方言アクセントの特徴

新島本村方言のアクセント体系は、表1に示したとおり音韻論的解釈を行えば共通語(注6)のアクセント体系と同じく、 $n+1$ の型の対立を示す。しかし、音声的相においては共通語とは異なった特徴が見られる。辰浜(1975)には、この特徴が次のように述べられている。

1. 「さがりめ」のないアクセント節、または「さがりめ」が第3拍より後ろにあるアクセント節は、第3拍から高く発音される。
2. 1のアクセント節の中、第3拍が/e,N/の場合は、第2拍から高く発音される。
3. 省略
4. 第2拍の後に「さがりめ」がある場合第2拍が/e,N/でも第2拍から高く発音され、東京語のように第1拍からは高く発音されない。

この記述にあるように、この方言では、声の上昇の位置が共通語に比べて後ろに送られ、3拍目から高く発音されることと、特殊拍がアクセントの型の区別に大きく関与していることが特徴といえる。

一方、青年層においては、「3拍目から高く発音される」という特徴は希薄になっているが、多拍語においてはこの特徴が現れることもある。また、「特殊拍とアクセントの関係」においても、高年層とは異なった特徴を見せている。

以下、高年層を中心に拍数ごとに「3拍目から高く発音される」特徴を中心に記述し、加えて、特殊拍とアクセントの関係について年層による差異を交えて記述する。

### (1) 1拍語

1拍語は、単独では型の対立はないが、付属語を付けると/○//○<sup>1</sup>/の対立を示し、共通語と同様である。

例・・・/○/ ka(蚊), ka<sup>1</sup>ga(蚊が)  
/○<sup>1</sup>/ 'i(絵), 'i<sup>1</sup>ga(絵が)

平板型を示す1拍名詞に、低く付く2拍以上の付属語が付くと、前述の「3拍目から高く発音される」という現象が見られる。

例・・・'ika<sup>1</sup>ra(胃から), 'iho<sup>1</sup>do(胃ほど), 'ida<sup>1</sup>jo(胃だよ),  
'ira<sup>1</sup>si<sup>1</sup>ɛ(胃らしい)  
kaka<sup>1</sup>ra(蚊から), kaho<sup>1</sup>do(蚊ほど), kada<sup>1</sup>jo(蚊だよ),  
kara<sup>1</sup>si<sup>1</sup>ɛ(蚊らしい)

この特徴は、青年層には見られず、2拍目から高く発音される。

例・・・'i<sup>1</sup>kara(胃から), 'i<sup>1</sup>hodo(胃ほど), 'i<sup>1</sup>da<sup>1</sup>jo(胃だよ),  
'i<sup>1</sup>rasi<sup>1</sup>ɛ(胃らしい)

## (2) 2拍語

2拍語は、やはり共通語と同様の／○○／／○○<sup>1</sup>／／○<sup>1</sup>○／の対立を示す。  
平板型を示す2拍名詞に、低く付く付属語が付くと、高さが1拍分後ろにずれる。

例・・・ka<sup>1</sup>ki (柿), kaki<sup>1</sup>ʒa (柿が)  
sa<sup>1</sup>ki (酒), saki<sup>1</sup>ʒa (酒が)

但し、助詞の{o} (を) が付くときは、融合を起こし、2拍目から高く発音される。

例・・・ka<sup>1</sup>kjo<sup>1</sup> (柿を), sa<sup>1</sup>kjo<sup>1</sup> (酒を)

## (3) 3・4拍語

3拍語は、これも共通語と同様に／○○○／／○○○<sup>1</sup>／／○○<sup>1</sup>○／／○<sup>1</sup>○○／の対立を、また、4拍語は／○○○○／／○○○○<sup>1</sup>／／○○○<sup>1</sup>○／／○○<sup>1</sup>○○／／○<sup>1</sup>○○○／の対立をそれぞれ示す。

1・2拍語の時に述べたように、原則としては3拍目までに「さがりめ」がない場合は3拍目より高く発音される。

例・・・suzu<sup>1</sup>mi (雀), suzu<sup>1</sup>miʒa (雀が)  
'e<sup>1</sup>ti (相手), 'e<sup>1</sup>tiʒa (相手が)  
cuki<sup>1</sup>mun (漬物), cuki<sup>1</sup>munʒa (漬物が)  
'a'ja<sup>1</sup>to'i (綾取り), 'a'ja<sup>1</sup>to'iʒa (綾取りが)  
si<sup>1</sup>nse<sup>1</sup> (先生), si<sup>1</sup>nse<sup>1</sup>ʒa (先生が)

青年層では、いわゆる反省的型としては、共通語と同じく2拍目から高い発音であるが、実際の発音では、特に4拍語において3拍目から高く発音される例が観察された。

## (4) 連体詞「この」が付いた場合

単独では低く始まる名詞に、連体詞の「この」が付く時は、高く平らに付く。この時は、3拍目から高く発音されるという原則には従わず、「この」の「の」から高く発音されるのが普通である。これは、後述する「母音の広狭とアクセント」との関連が考えられる。

例・・・ko<sup>1</sup>nokaʒa (この蚊が)  
ko<sup>1</sup>nosakiʒa (この酒が)  
ko<sup>1</sup>nosinakaʒa (この背中が)  
ko<sup>1</sup>nosinse<sup>1</sup>ʒa (この先生が)

## 3. 音環境とアクセント

ここでは、「3拍目から高く発音される」という原則に合わないものについて記述する。原則に合わない要因としては、「母音の広狭」と「特殊拍」が認められた。

以下、音環境に伴うアクセントの特徴について記述する。

## (1) 母音の広狭とアクセント

2拍目の母音が広母音である時には、2拍目から声の上昇が観察されることがある。

- 例・・・ha<sup>ˈ</sup>na (鼻), ha<sup>ˈ</sup>naŋa (鼻が)  
'i<sup>ˈ</sup>ka (烏賊), 'i<sup>ˈ</sup>kaŋa (烏賊が)  
'a<sup>ˈ</sup>kazi (赤字), 'a<sup>ˈ</sup>kaziŋa (赤字が)  
'i<sup>ˈ</sup>naka (田舎), 'i<sup>ˈ</sup>nakaŋa (田舎が)  
so<sup>ˈ</sup>robaN (算盤), so<sup>ˈ</sup>robaŋa (算盤が)  
sa<sup>ˈ</sup>kazuki (杯), sa<sup>ˈ</sup>kazukiŋa (杯が)

但し、これは必ずしも安定してはいない。同じ話者が繰り返し発音しても、揺れが見られ、○●●と記述するより、○◎●と記述した方が実態に近いと言えそうなものである。話者の意識としては、○○●である。2拍目が狭母音である場合○○●が、話者の意識としても実際の発音でも安定していること比較すると特徴的である。このことは、先行文献に述べられていないことと、不安定な特徴であることから本来のアクセント体系によるものでなく、共通語化の一側面だと考えられる。

2. (4) で述べたように、「この」が付くときは、2拍目である「の」から高く発音されるが、これはこの「2拍目の母音が広母音」の例と考えられる。

## (2) 特殊拍とアクセント

新島本村方言では、特殊拍の独立性が弱く、共通語に比べ短く発音される。この特殊拍とアクセントの関係については、先行文献でも取り上げられていることであるが、ここでは特殊拍の位置とアクセントの関係について、名詞を中心に記述する。特殊拍がアクセントに影響を与え、この方言のアクセントの原則を崩すことは、連母音においても認められることであるが、ここでは省略した。

特殊拍の位置とアクセントの関係を表2 (1~4) に示す。

「平板型・頭高型」などの型の区別は共通語のアクセントに従った(注7)。また、/N・Q・E/はそれぞれ、撥音拍・促音拍・長音拍を意味する。各年層に複数の相が示してあるものは、両方の相が現れることを示しているが、いずれも最初に示した方が優勢の相である。語例の箇所に斜線を施したものは、共通語においてその条件にあてはまる語例はないと判断されるものである(注8)。なお、4拍名詞の4拍目が特殊拍のものについては省略したが、それは、この方言では「3拍目からの声の上昇」が問題となるため、ここでは関係ないと判断したためである。また、空欄になっているものは、今回の調査では資料が得られなかったことを示している。

### ①平板型

高年層では、原則として2・3拍目の/N・E/の高さは前接の拍の高さに従い低く発

音され、その直後に声の上昇がある。これは、東京方言などで1拍から高く平らに発音されることと対照的である。また、前掲の辰浜（1975）に示された若郷方言とも異なる表2（1） 平板型

拍		2拍目/N/	3拍目/N/
2	語例	teN (点)	
	高年層	●●, ●●▶~○○▶	
	青年層	●●, ●●▶	
3	語例	saNma (秋刀魚)	zikaN (時間)
	高年層	○○●, ○○●▶	○○●●, ○●●▶
	青年層	●●●●, ●●●▶ ~○○●●, ○○●▶	~○○○▶ ○○●●, ○●●▶
4	語例	sinbun (新聞)	'akano (乳児)
	高年層	○○●●●, ○○●●▶	○○○○●, ○○○●▶
	青年層	●●●●●, ●●●●▶ ~○○●●●, ○○●●▶	~○○●●●, ○●●●▶ ○○●●●, ○●●●▶
3		2拍目/Q/	3拍目/Q/
	語例	kiqte (切手)	
	高年層	○○●, ○○●▶	
	青年層	○○●, ○○●▶	
4	語例	teqpoE (鉄砲)	su'iqko (未っ子)
	高年層	○○●●●, ○○●●▶	○○○○●, ○○○●▶
	青年層	○○●●●, ○○●●▶	○○●●●, ○●●●▶
2		2拍目/E/	3拍目/E/
	語例	njaE (庭)	
	高年層	●●, ●●▶~○○▶	
	青年層	(ni'wa)○○●, ○●▶	
3	語例	kiEto (毛糸)	cikjuE (地球)
	高年層	○○●, ○○●▶ ~●●●●, ●●●▶	○○●●, ○●●▶ ~○○○▶
	青年層	●●●●, ●●●▶	○○●●, ○●●▶
4	語例	ʒjuEɲjuE (牛乳)	kasoba (火葬場)
	高年層	○○●●●, ○○●●▶	○○○○●, ○○○●▶
	青年層	●●●●●, ●●●●▶ ~○○●●●, ○○●●▶	○○●●●, ○●●●▶

特徴である。なお2拍語の場合は、1拍目から高く平らに発音される方が優勢である。青年層では/Q/の場合を除いて、1拍目から高く発音されるが、拍数が増すと3拍目から上昇する発音も観察された。

3拍目が/N・E/の場合は、3拍語では2拍目から高く発音されるが、助詞が続くと声の上昇を後ろへ送り、助詞だけが高く発音されることもある。4拍語では4拍目から高く発音されるのが一般的である。

一方青年層では共通語と同様に、2拍目から高く発音されるのが一般的である。

### ②尾高型

条件に合った語が得られず、詳し

表2 (2) 尾高型

拍		2拍目/N/	3拍目/N/
3	語例	'onna (女)	
	高年層	○○●, ○○●▷	
	青年層	●●●, ●●●▷ ~○○●, ○○●▷	
4	語例		
	高年層		
	青年層		
		2拍目/Q/	3拍目/Q/
3	語例	'aŋci (あっち)	
	高年層	○○●, ○○●▷	
	青年層	○○●, ○○●▷	
4	語例		
	高年層		
	青年層		
		2拍目/E/	3拍目/E/
3	語例	'eŋti (相手)	
	高年層	○○●, ○○●▷	
	青年層	('a'ite) ○●●, ○●●▷	
4	語例		'imoŋto (妹)
	高年層		○○○●, ○○○●▷ ~○●●●, ○●●●▷
	青年層		○●●●, ○●●●▷

表2 (3) 中高型

拍		2拍目/N/	3拍目/N/
3	語例	kaŋŋe (考え)	hudaŋi (普段着)
	高年層	○○●○, ○○●○▷	○●●○, ○●●○▷
	青年層	●●●○, ●●●○▷	○●○, ○●○▷
		2拍目/Q/	3拍目/Q/
4	語例	'iŋka'i (一回)	'asaŋti (あさって)
	高年層	○○●○, ○○●○▷	○●○, ○●○▷
	青年層	○○●○, ○○●○▷	○●○, ○●○▷

くは述べられないが、おおむね、平板型のところで述べたことと同様の特徴が見られた。

③中高型

3拍語で中高型を示すものの内、2拍目が特殊拍であるものは共通語にはないので、ここでは4拍語のみ取り上げた。また2拍目が特殊拍の語は、中2高型の語例であり、3拍語が特殊拍の語は中1高型の語例である。

2拍目が/N・E/の場合は、高年層では3拍目から高く発音されるが、青年層では1拍目から高く発音される。

また、3拍目が/N・E/の場合は、高年層では、前接の拍と一緒に高く発音され、平板型の時のように声の上昇を後ろへ送るといった現象

が見られないのが特徴である。

④頭高型

2拍目が/N・E/の場合は、高年層では、拍数にかかわらず2拍目まで高く発音されるのが一般的であり、かなり安定している。しかし、2拍語では、1拍目だけが高い発音が観察される。青年層では、4拍語ではこの2拍目まで高く発音されるという現象が安定しているが、その他の場合は、いずれも1拍目だけが高く発音される。

⑤まとめ

この方言では特殊拍が一般拍と連動してアクセントに関与し、あたかもシラビーム方言のような特徴を見せている。また、年層による差異が共通語化の一側面を呈している。

		2拍目/E/	3拍目/E/
語例		'eEsOE (愛想)	hikoEki (飛行機)
高年層		○○●○, ○○●○▷	○●●○, ○●●○▷
青年層		('a' isoE) ○●●○, ○●●○▷	○●●○, ○●●○▷

表2 (4) 頭高型

拍		2拍目/N/	3拍目/N/
2	語例	hoN (本)	
	高年層	●●, ●●▷~●○, ●○▷	
	青年層	●○, ●○▷	
3	語例	kin&jo (金魚)	sikin (世間)
	高年層	●●○, ●●○▷	●○○, ●○○▷
	青年層	●○○, ●○○▷	●○○, ●○○▷
4	語例	kinpira (きんぴら)	buranko (ブランコ)
	高年層	●●○○, ●●○○▷	●○○○, ●○○○▷
	青年層	●●○○, ●●○○▷	●○○○, ●○○○▷
3	語例	daQko (雑魚)	
	高年層	●○○, ●○○▷	
	青年層	●○○, ●○○▷	
4	語例	'jaQkeE (厄介)	
	高年層	●○○○, ●○○○▷	
	青年層	●○○○, ●○○○▷	
2	語例	keE (貝)	
	高年層	●●, ●●▷	
	青年層	(ka' i)●○, ●○▷	
3	語例	kjuEri (胡瓜)	bataE (バター)
	高年層	●●○, ●●○▷	●○○, ●○○▷
	青年層	●○○, ●○○▷	●○○, ●○○▷
4	語例	sjoEbeE (商売)	
	高年層	●●○○, ●●○○▷	
	青年層	●○○○, ●○○○▷	

#### 4. まとめ

新島本村方言のアクセントについて、その特徴を次のようにまとめておく。

- (1) アクセント体系は、共通語と同じくその弁別の特徴は「さがりめがあるか、ないか。あるならばどの拍にあるか」によって示される。
- (2) 3拍目までに「さがりめ」がない場合は、2・3拍目に特殊拍がない場合は原則として3拍目から高く発音される。
- (3) (2)のうち、2拍目が広母音の場合は、2拍目から高く発音されることがある。
- (4) 高年層においては、2・3拍目の/N・E/の高さは、その語のアクセントの型を保持しながら、前接の拍の高さに従うのが一般的である。なお、/N・E/の直後に「さがりめ」がくることができる。
- (5) 青年層においては、2・3拍目の/N・E/の高さは、頭高型の場合を除き、後接の拍の高さに従い、前接の拍をその高さに従わせる。また、頭高型の場合は共通語と同様であるが、多拍語では、2拍目の/N・E/にも高さを持たせることがある。なお、原則として/N・E/の直後に「さがりめ」がくることができない。
- (6) 特に青年層において共通語化が進んでいるが、特殊拍を含むものとそうでないものとは異なった様相を呈している。

注1) 平山輝男編『伊豆諸島方言の研究』明治書院

注2) 木野田れい子”伊豆新島若郷方言のアクセント変化”「音声学会会報 147」

注3) 辰浜マリ子”伊豆新島若郷方言における動詞活用形のアクセント”「都大論究12」

注4) 大島一郎編『新島方言の記述的研究』東京言語調査研究会

注5) 音環境との関連で用いる「アクセント」とは、型としてのアクセントに限定せずに、音声的相あるいは音調としての意味を含めて用いる。

注6) 本稿では「共通語」は、東京山の手方言を基調とする標準的な発音に対するものとし、東京の実際の発音については「東京方言」を用いる。

注7) NHK編『日本語発音アクセント辞典改訂新版』（1985）日本放送出版協会及び、秋永一枝編『明解日本語アクセント辞典第二版』（1985）三省堂参照。

注8) 秋永一枝（1985）付・P4に次のような記述が見られる。

引き音（一）、撥音（ン）、促音（ッ）のような拍はアクセントの頂点がおきにくい。そのため、アクセントの高さの切れめがそこにくると、その位置が原則として前にずれる。

<参考文献> 上記引用・参考文献以外の参考文献を挙げておく。

- 1) 上野善道”アクセント調査語彙用参考資料 体言篇(1)”(1981)「アジア・アフリカ文法研究 10」

(いでの けんじ・伊那西高等学校教諭)